

本丸御殿音声ガイド

01. 中之口部屋

(春風亭昇太さん)

みなさん、こんにちは。本日は名古屋城本丸御殿へおいでいただき、ありがとうございます。本丸御殿のガイド役を務めさせていただきます、落語家の春風亭昇太です。どうぞよろしくお願いいたします。

さあ、城というと、まず皆さんが思い浮かべるのは、そびえ立つ天守ではないでしょうか。ところが江戸時代には、お城の中心機能が集まっていたのは、御殿でした。御殿は城主が暮らしたり、家臣団と議論をしたり、将軍や諸藩の大名など、お客様を迎える迎賓館であったりと、とても実用的な建物でした。

名古屋城本丸御殿は、慶長 20 年、1615 年に徳川家康の命令で建てられました。そして寛永 11 年、1634 年に大改築され、将軍専用の宿舎に生まれ代わりました。

そして名古屋城は、日本で最大規模の天守と御殿の両方が、江戸時代とほとんど変わらない姿で残っている、奇跡のような城でした。昭和 5 年、1930 年には、お城としては国宝第 1 号に指定されています。ところが昭和 20 年の空襲で、天守と御殿は焼失してしまいました。とても残念なことです。

ところが今、本丸御殿が昔通りの姿に復元されました。建物の姿も、中の様子も、昔と同じように再現されています。さあ、本丸御殿の中へさっそく入ってみましょう。

02.大廊下

(春風亭昇太さん)

本丸御殿は空襲で焼失してしまいましたが、それでも名古屋城には、最後の運が残されていました。襖絵や天井の絵ははずされて、疎開されていたんですね。それらは空襲で燃えることなく、1047面が現存し、重要文化財に指定されています。

また戦争で燃える前に、名古屋城は多くの記録写真が撮影され、建物の詳しい実測図もつくられました。それらも戦災を免れて、現存しています。

これだけ多くの記録が残されているため、本丸御殿は正確に復元できたのです。これほどハイレベルな復元ができるのは、日本のお城の中で、名古屋城だけでしょう。

さて、今、皆さんがおられるのは、^{おおろうか}大廊下と呼ばれる場所です。玄関と表書院という建物をつなぐ廊下です。床はすべて継ぎ目のない一枚板でできていて、大廊下の幅は約6メートルあります。これだけ長くて、質のよい一枚板を手に入れるのは、今では大変なことです。

ここは尾張徳川家を訪れた来客が、必ず通る廊下でした。そのため、最高の木材が使われているんです。

さて、本日のガイドはもう1人、大変心強い方に来ていただいています。本丸御殿を建てられたご本人、徳川家康公、当時の様子を一番よく知っている方です。私は少し先回りして待っております。では家康様、よろしくお願ひします。

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

昇太殿、あいわかった。

03. 玄関一之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

はっ、はっ、は

みなの方、わしが徳川家康である。今から 400 年前、戦国の世を終わらせ、江戸幕府の初代将軍として、太平の世の礎を築いたのが、このわしじゃ。

名古屋城は慶長 15 年、1610 年にわしの命により築かれた城じゃ。初代の城主は徳川義直、わしの九男坊じゃ。

これより、わしが本丸御殿を案内いたす。存分に楽しんで行くがよい。

さて今、我らが入ったのは、玄関という建物じゃ。名古屋城に客人が参られたときには、まずこの建物に入って、一息ついてもらったのじゃ。

手前の部屋が一之間じゃ。中を見られよ。四方の壁や襖には、虎と豹の姿が描かれておる。部屋の右側にある襖絵は竹林豹虎図ちくりんひょうこずというてのう、竹藪の中で虎や豹が群れ遊ぶ絵じゃ。

さて、本丸御殿の中の絵を描いたのは、狩野派かのうはの絵師たちじゃ。狩野派とは、徳川幕府のお抱え絵師たちで、江戸時代を通じて、日の本の絵師の中心となった集団であった。

今、我らが見ておる絵は、復元模写というものじゃ。今の世の絵師たちが、戦争で燃えなかった襖絵を何度もよく見て、描かれた時にはどんな色であったか、どんな絵の具が使われておったのかを、しっかり研究したのじゃ。そうして描かれた当時の美しい姿が復元できたのじゃ。

04. 玄関二之間、車寄

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここは玄関二之間じゃ。ここにも、たくさんの虎と豹が描かれておる。

虎は日の本^{ひもと}には住んでおらぬ。わしがこの世におったころは、虎は強いだけでなく、我らに幸せをもたらしてくれる、不思議な力を持った生き物じゃと聞いておった。また、虎と豹は同じ動物で、オスが虎、メスが豹だと考えられておったのじゃ。

客人はまずここに通され、城主との対面までの間、この虎の絵を必ず見たのじゃ。客人たちはその時、何を思っておったのであろうか。この城の^{あるじ}主はどんな人物であらうか、この先にはどんな美しい部屋が待っているのであろうか、緊張しながらもわくわくしていたはずじゃ。

では次に、天井を見られよ。左右には長い木材が渡されて、天井板を支えておる。これを^{さおぶち}竿縁天井という。実は天井のつくりは、その部屋の格をあらわしておるのじゃ。ここは玄関じゃから、まだ格は低い方じゃ。ここから先へ進むと、どんどんと格が高くなってゆくぞ。

では今度は、背中側を見られよ。ここは今では^{くるまよせ}車寄と呼ばれておる。御殿への正式な入口じゃ。本来、客人はここから入ってもらった。わしが出入りしたのも、ここからじゃ。思い出すのう。慶長 20 年、1615 年 4 月 15 日の朝のことじゃった。わしはここから大坂夏の陣へ出陣し、豊臣家との最後の戦いに向かったのじゃ。

05. 表書院三之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここからは表書院という建物じゃ。城主が客人と、公式に対面する場所。本丸御殿は、全部で13棟^{むね}の建物からできておるが、その中でも一番大きな建物である。

一番手前の部屋が三之間じゃ。ここでは手前から三之間、二之間、一之間という順に、だんだんと格が高い部屋となっていく。

中を見られよ。周りに描かれている生き物は麝香猫^{じゃこうねこ}と申す。この部屋の絵は麝香猫図と呼ばれ、周りには水辺に咲く海棠^{かいどう}の花など、夏の草花が描かれておる。

麝香猫は日の本には住んでおらぬ。何でも、今の世ではインドネシアと呼ばれる異国に住んでおるそうじゃ。わしがこの世におったころは、幸せをもたらしてくれる、不思議な生き物じゃと聞いておった。

次に天井を見られよ。今度は木材が四角形に組み立てられていて、天井板を支えておる。これを格天井^{ごうてんじょう}というのじゃ。先ほど、玄関で見た竿縁天井^{さおぶち}よりも、こちらの方が格上。客人が一休みする玄関よりも、城主と対面する表書院の方が、格が高いというわけじゃ。廊下も格天井になっておるぞ。

06. 表書院二之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

続いて二之間じゃ。右側の襖を見られよ。きれいのござろう。これはまきかえでつばきず槿楓椿図という。この部屋の絵には、秋の草木や花が描かれておる。さて、この襖の、真ん中の2枚の間をよく見られよ。本日が夏の季節であれば、襖は開いておるかもしれんがのう。であれば左端の襖と、その隣の柱との間を見られよ。この襖には鍵が付けられておる。徳川の世では、客人といえども身分や役職によって、城主にお目通りができる者と、できない者がおった。お目通りできない客人は、三之間にお通しした。城主が姿を見せる前に、襖を閉め、鍵をかけておいたのじゃ。そうしておけば、三之間の客人は、間違っても城主の姿を見ることはない。

左側の襖を見られよ。これはまつかえできんちょうず松楓禽鳥図という。禽鳥とは、平たく言えば鳥のことじゃ。次に正面の壁を見られよ。ここには何も描かれてはおらぬ。徳川の世が終わった後、明治と呼ばれる時代がやってきたそうじゃ。その時、ここが陸軍なる組織の司令部として使われた時期があった。この壁にも、松や鳩を描いた絵があったのじゃが、おそらくその時に壊されてしまったと思われる。

ここの絵は、はっきりした記録が残っておらぬ。こたび此度の復元では、証拠がない絵を描くことは許しておらぬ。故に壁には何も描かれておらぬのじゃ。

07. 表書院一之間、上段之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

手前が一之間、奥の一段高い部屋が上段之間じゃ。一之間は、客人の中で最も身分の高い者が座る。上段之間には城主がこちらを向いて座り、対面をする場じゃ。

一之間の絵は^{おうかきじず}桜花雉子図という。桜の下で雉子が遊ぶ、めでたき絵じゃ。季節はもちろん春。表書院では春、夏、秋の風景が絵で楽しめるようになっておる。

では、天井を見られよ。天井板の中に、マス目のような細かい木組みが付いておる。これを^{こぐみごうてんじょう}小組格天井とって、普通の格天井よりも格が高いことをあらわしておる。

奥の上段之間を見られよ。この部屋には特別贅沢な、座敷飾りがつくられておる。まず正面に見えるのが、大きな松が描かれた^{とこ}床であるぞ。その左側、廊下に少し張り出した、机のような形をしたところが^{つけしょいん}付書院じゃ。

床の右側、棚板が段違いになっているところが^{ちがいだな}違棚である。ここからはちいと見えにくい、さらに右側の、赤い房が付いた壁は^{ちょうだいがまえ}帳台構とって、扉の形をした飾りじゃ。

もう一度申すぞ。これらの座敷飾りが、左から付書院、床、違棚、帳台構という順番で揃っておるのが、武家の書院造で最も格式の高い姿なのじゃ。実際に客人を迎える時には、ここに掛軸や文房具などを飾って、尾張徳川家の財力と教養の高さを見せつけたのじゃ。

上段之間は天井も格が高い。周りを丸くせり上げて、一段高くなっておる。天井板には、やはり細かい木組みが付いてある。これを^{おりあげこぐみごうてんじょう}折上小組格天井というのじゃ。上段之間の座敷飾りや天井は、左側の付書院のところまで進むと、よく見えるぞ。

さて、ここから先に進むと、^{たいめんじょ}対面所と申す建物に入る。そこで春風亭昇太殿が待っておられるはずじゃ。昇太殿、御頼み申す。

08. 対面所納戸一之間、二之間

(春風亭昇太さん)

はい、家康様。春風亭昇太です。

ここは対面所^{たいめんじょ}という建物です。

御殿というのは普通、表^{おもて}、中奥^{なかおく}、奥の3つのエリアに分かれています。表は来客と対面するところ。中奥は城主が生活するところ、奥は城主の家族の住まいです。本丸御殿も最初は、この北側、今は広場になっているところに、中奥や奥の建物が立ち並んでいました。

ところが元和^{げんな}6年、1620年、初代城主、徳川義直は二之丸御殿へ移り、城の中心機能も、そちらへ移されました。そして14年後の寛永11年、1634年に、本丸御殿は大改築されました。普段使いは二之丸御殿、この本丸御殿は將軍専用の宿舎と、役割分担をしました。この時、中奥や奥の建物は取り壊され、表の建物は残されました。それが先ほど御覧いただいた玄関や表書院です。

しかし、中奥にあった建物が一つだけ残っています。それがこの対面所です。ここは城主が親戚や家臣など、近しいものたちと会うための場所でした。

さて、いま皆さんがいらっしゃる部屋が、対面所^{なんど}の納戸二之間、奥の部屋が納戸一之間です。納戸とは、名古屋城では控室という意味に使われていました。

この二^{ふた}部屋^{へや}の絵は、山水花鳥^{さんすいかちょうず}図といえます。八重桜、水辺で遊ぶ鳥、紅葉^{もみじ}など、春、夏、秋の風景を一度に描いています。お殿様も、毎日金ぴかの絵に囲まれて生活していたわけではありません。生活の場である中奥には、お殿様の緊張をほぐしてくれるような、落ち着いた絵が描かれていたようです。

さて、実際に家臣たちと対面した部屋は、家康様に案内していただきましょう。家康様、よろしくお願ひいたします。

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

昇太殿、あいわかった。

09. 対面所次之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

こちらが対面所次之間^{つぎのま}じゃ。城主の親戚や家臣など、近しい者が通される部屋である。城主は左手の襖の向こう側、一段高い上段之間に座して、対面したのじゃ。

この部屋の絵は、紀州和歌山の風景を描いたものじゃ。右側の襖を見られよ。

右は和歌山の城下町、そして左の方に目を移していくと和歌山の海、和歌浦^{わかのうら}が描かれておる。正面の壁と左側の襖も、同じく和歌浦の景色じゃ。和歌浦の景色が美しいことは、古くから有名であった。ここの絵のように、名所の風景の中に、大勢の人々や四季の風物を描いた絵を、今の世では風俗図と呼ぶそうじゃな。

ところで、尾張名古屋の初代城主は、わしの九男坊、徳川義直。その花嫁、春姫は和歌山の浅野家からお迎えした。春姫を嫁に迎えたのは慶長 20 年、1615 年じゃった。これは本丸御殿が完成した年じゃ。この絵は徳川家と、和歌山の浅野殿との深い絆をあらわしておる。

では、天井をご覧あれ。先ほどの表書院上段之間と同じ、折上小組格天井^{おりあげこぐみごうてんじょう}じゃ。ところが、ここには黒い漆が塗られ、天井板には金箔が貼ってある。天井は表書院より豪華なつくりになっておるのじゃ。

10. 対面所上段之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここが対面所上段之間じゃ。この部屋の絵も風俗図と呼ばれる。ここは京の都の風景が描かれておる。慶長8年、1603年に、わしが将軍に任ぜられてからは、都も徳川幕府が支配する所になっておった。

左側の床には、都の西側、愛宕山あたごやまのふもとで宴うたげを楽しむ公家衆などが描かれておる。正面の帳台ちょうだい構がまえに描かれておるのは、都の北側、上賀茂神社の神事である加茂競馬か もくらべうまじゃ。この神事は今でも、毎年5月5日に行われておる。2頭の馬を競争させて、その勝ち負けで吉凶を占うのじゃ。ここの飾り金具は見事であろう。

右の襖は都の東側じゃ。真ん中では田植えが行われておる。右上の建物は吉田神社じゃ。ここの神主、吉田兼見かねみはなかなかのやり手でのう、神主としては日の本一の地位まで昇り詰めた男じゃ。織田信長公、豊臣秀吉公、そしてこの家康とも親しい仲であった。

では、天井をご覧あれ。今度は中央をもう一段せり上げた、二重おりあげこぐみの折上小組格天井ごうてんじょうになっておる。これまで見てきた中では、一番豪華なつくりじゃ。本来であれば、表書院上段之間の方が、部屋としては格上のはずであるが、天井のつくりは逆転しておる。わしが何故なにゆえ、対面所の天井をこのようにつくれと命じたかはわかるかのう。何、わからんとな。実はわしにもわからんのじゃ。昔のこと故忘れてまったわ。徳川家康も470を超え、年には勝てんかもしれんのう。

さて、ここから先に進むと、鷺之廊下さぎのろうかに入る。そこで再び春風亭昇太殿が待っておられるはずじゃ。昇太殿、あいまかせた。

11. 鷺之廊下

(春風亭昇太さん)

はい、家康様。春風亭昇太です。

ここは鷺之廊下という場所です。ここに書かれた絵は雪中柳鷺図といいます。雪が積もる枯れ柳の周りに、たくさんの白鷺が群れ遊んでいます。

少し上を見て下さい。柱と柱をつなぐ、水平の木材を長押といいます。これまで御覧になられた建物は、長押の下にだけ絵が描かれていました。ここは長押の上、天井のすぐ近くまで絵が続いています。格天井の格子には黒い漆が塗られ、十文字形の金具で飾られています。

これまで見てきた表書院や対面所は、桃山文化の建物でした。桃山文化は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が天下統一を進めていく中で生まれた、ダイナミックで勢いのある文化です。金箔地に濃い色彩で描かれた障壁画は、まさに桃山文化を体現しています。

ここから先の建物は寛永 11 年、1634 年に増築されました。本丸御殿が最初に建てられてから 19 年後です。このときは江戸時代初めの新しい文化、寛永文化に移っていました。寛永文化は優美な装飾、明るい色彩が特徴で、そして日本や中国の古典文化に学ぼうという姿勢を持っていました。

名古屋城本丸御殿には桃山文化と寛永文化、2 世代の文化が同居しています。このような建物は、日本じゅうでもここだけでしょう。

では、さっそく上洛殿へ進みましょう。

上洛とは、京の都へのぼることです。寛永 11 年、1634 年、江戸幕府 3 代将軍徳川家光が上洛する際、名古屋城に宿泊するために、上洛殿は建てられました。

この建物は、将軍とそれをお迎えする名古屋城主や家老たちが対面を行ったところで、手前から三之間、二之間、一之間とつづきます。一之間の奥には、将軍が座る上段之間があります。

ここからも家康様に案内していただきます。では家康様、お願いいたします。

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

昇太殿、心得た。

12. 上洛殿入側

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

さあさあ、ここが上洛殿じゃ。

まず断っておくが、ここが建てられたのは、わしがあの世に旅立ってから、18年後のことじゃ。わしは直接見たことがないがゆえ、あの世で我が子孫たちから聞いた話しを、みなに伝えることとあいなるのじゃ。ゆるせ。

さあ、廊下を見るのじゃ。部屋側の長押なげしの上には、荒々しい波が岩に打ち寄せ、飛沫しぶきが上がる絵が描かれておる。長押には、大きな釘隠しが並んでおる。

部屋の中を見るのじゃ。ちいと遠いが、欄間らんまが色鮮やかな彫刻でつくられておるのが見えるであろう。これは桃山文化では、いまだ主流ではなく、寛永文化で広まった飾りじゃ。

では、廊下を進み、先に見える欄間らんまに近づくのじゃ。寛永文化の御殿は、かなり細やか、技巧的なつくりになっておることがよく分かるところじゃ。

見事な彫刻であろう。欄間にあらわされた青い鳥はお、山鵲さんじゃくと申す。山鵲は日本には住んではおらぬ。今で申すところの中国やベトナムなる国に住んでおるそうじゃ。尾の長い鳥は一族の繁栄などをしめす、めでたき生き物であると考えられておった。

この欄間の下には、杉板の大きな戸が付けられておった。本丸御殿は中に入っても、いくつもの戸や襖で仕切られ、奥の方は、簡単には見えぬようになっておったのじゃ。

13.上洛殿上段之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここが将軍専用の座敷、上段之間じゃ。部屋の中を見よ。将軍は右を向いて座り、さらにその右側、一段低い一之間に名古屋城主、家老などが入り、対面した所である。

この部屋は本丸御殿の中でも、最も格式が高いつくりになっておる。左に大きな^{とこ}床、その右奥には^{ちが}違い棚がある。正面の壁は^{ちょうだいがまえ}帳台構^なんどの^ま間^なんど^のま^まにつながつておる。帳台構の飾り金具には、よく見ると水色や濃い青に彩られたところがある。ガラス質の^{うわぐすり}釉薬を焼き付けた、七宝焼きの技法が使われておるのじゃ。

天井を見よ。天井板を2段せり上がらせた、二重の折上げ格天井^{ごうてんじょう}じゃ。上洛殿には、天井板にまで絵が描かれておる。天井板絵は緑色の絵の具で^{ふちど}縁取られ、山水図など、1枚1枚異なる絵が描かれておるのじゃ。

今度は右側、一之間との間の^{らんま}欄間を見るのじゃ。ん？。奥の方で白い鳥の姿が半分だけ見えておるのう。実は今、われらは欄間を裏側から見ておるのじゃ。表は隣の一之間を向いておる。では表側を見に行こうではないか。

14.上洛殿一之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここが一之間じゃ。上段之間と一之間の襖や壁に描かれた絵は、帝鑑図^{ていかんず}と呼ばれる。帝^{てい}は皇帝の帝、鑑^{かん}は動物図鑑の鑑という文字を書く。古代中国の皇帝が、いかによい政治を行ったか、数々の説話が描かれておる。それを徳川の世において、政治の手本にするためのものじゃ。

次に欄間^{らんま}を見るのじゃ。正面と右側、この部屋だけ両方とも欄間は表を向いておる。正面は鶴と亀、右側は鶏じゃ。

さて、右手の奥に、白い鶏が太鼓の上にとまっておることに気付いたかのう。この太鼓は諫鼓^{かんこ}という。漢字では、諫^{かん}は「殿を諫める」^{いさ}の諫め、鼓は太鼓の鼓という字を書く。

これも古代中国の逸話であるが、皇帝がこの太鼓を用意したそうじゃ。そして政治に不満がある者はこれを鳴らし、われを諫めよと民に告げた。ところが誰も叩く者はおらず、太鼓には苔^{こけ}が生えてしまった。それだけよい政治が続いていたということじゃ。それで鶏が安心をして、上にとまってしまった姿が彫刻であらわされておるということじゃ。

さて、ここは上段之間に座する将軍が、自らの権威を示す場所じゃ。将軍が何を見るかよりも、いかに将軍を威厳に満ちた姿に見せるかが大事であった。将軍は一番美しい飾りの奥から、姿を現すようにできておるのじゃ。欄間は一之間が表側、上段之間が裏側となっておるのは、そういう理由じゃ。

15. 上洛殿二之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここが二之間じゃ。一之間で將軍に對面する者の、次の位の者が入った。

二之間の絵は^{きんきしよがず}琴棋書画図と申す。漢字では、^{きん}琴は樂器の^{こと}琴、^き棋は将棋の棋、書は書物の書、画は絵画の画という文字を書く。琴、囲碁、書の読み書き、絵の鑑賞、この四つは中国の文化人たちにとって、必ず身につけておくべき教養であった。

左の襖を見られよ。一番左側に、膝の上に琴を載せて、奏でておる者がおる。右の襖を見られよ。右から3面に、4、5人の男女が集まり、囲碁を打っておる。正面の^{とこ}床を見られよ。建物の中には5人の男が集まり、書の読み書きをしておる。ここからは見えぬが、手前の襖には、絵を鑑賞して楽しむ人物が描かれておる。

さて、今度は天井を見よ。ここも天井板に絵が描かれておる。周りは黄色みがかった赤色で^{ふちど}縁取られ、花や鳥など1枚1枚異なる絵が描かれておる。

左上の^{らんま}欄間を見てくれのう。これは先ほど一之間で見た、鶏の裏側じゃ。右上の欄間を見よ。赤い尾長の鳥は、^{きんけい}錦鶏と申す。今にも飛び降りてきそうじゃのう。これも日本には住んでおらぬ。中国南西部の山奥に住んでおるそうじゃ。

さて、今度は廊下の^{なげし}長押に付けられた、大きな釘隠しを見るのじゃ。これは今で申すところの、花束の形をあらわしておる。左右には金色の^{ききょう}桔梗の花が見えておる。真ん中の黒いところは、花を包んだ^{のしがみ}熨斗紙をあらわしておる。

この釘隠しは銅でできておるのじゃが、全体は金色に輝いておる。これは今の世で言うメッキなる技法で仕上げられておるのじゃ。よく見ると、熨斗紙の上半分にはブドウの実、下半分にはリスがあらわされておる。意外にも、かわいい動物が隠れておるであろう。

16.上洛殿三之間

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここが三之間じゃ。まず右の襖を見られよ。この絵は雪中梅竹鳥図せつちゅうばいちくちようずと申す。梅の木に雪が積もっておるが、よく見ると花は咲き始めておる。右から2面目、梅の枝には雉子がとまり、まわりには小鳥が飛んでおる。早春の風景じゃ。

次に正面の襖を見よ。こちらは水辺に白鷺が舞う、夏の風景じゃ。左側の襖を見られよ。襖は開けられておるがゆえに、絵のすべては見えぬが、今度は晩秋の風景じゃ。枯柳かれやなぎに白鷺がとまっておる。ここからは見えぬが、手前の襖は冬じゃ。竹に雪が積もり、雀が飛んでおる。一部屋に、四季の花鳥図が描かれておるのじゃぞ。

上洛殿の襖を描いた絵師は、狩野探幽かのうたんゆうと申す者じゃ。探幽は幕府の御用絵師ごようえしにて、狩野派の全盛期を築いた人物である。今の世では、「日本史の教科書」なる書物に、「寛永文化を代表する絵師である」と記されておるそうじゃな。

さて、天井を見上げよ。天井板の絵は七宝唐草文図しっぽうからくさもんずという。天井板1枚に1つの円が描かれておる。天井の格子が交差するところを中心に見ると、そこにも一つ円をつくり出され、それが連なる文様になっておる。

さて、ここに通された者は、上段之間に座する將軍の姿を、直接見ることはかなわなかったやもしれぬ。されど、襖が閉められておったとしても、欄間らんまがつながっておれば、そこは一続きの場であると、みなが承知しておった。將軍の姿は見えずとも、対面を果たしたことになるのじゃ。

さて、ここから先に進むと、梅之間うめのまに入る。そこで春風亭昇太殿が待っておられるはずじゃ。昇太殿、御願ひ申す。

17. 梅之間

(春風亭昇太さん)

はい、家康様。春風亭昇太です。

さあ、ここは梅之間うめのまと呼ばれる部屋です。ここも寛永 11 年、1634 年に増築された所です。

先ほどの上洛殿は、将軍と対面するための建物でした。ここには将軍はやってきません。これから将軍と対面する者たちが、それまでの間に控える部屋、あるいは将軍をもてなす役割に任じられた者が、控える部屋であったと考えられています。

正面とこの床、そしてその右側の壁を御覧ください。これらの絵は雪梅図せつばいずといます。雪と梅の絵です。梅の枝が横に長く伸び、地面には雪が積もっています。しかし、よく見ると、梅の花は咲き始めていて、季節は早春をあらわしています。

控室と言っても、これから将軍に対面する人物ですから、かなり位の高い人も入ったはずです。そのため立派な床や障壁画が用意されています。

名古屋城本丸御殿は、将軍専用の宿舎です。しかし、すべての部屋を将軍が使ったわけではありません。ここ、梅之間のように、対面を待つ者の控室や、台所、料理の盛り付けをする部屋など、バックヤードも必要でした。これから先はそんなエリアになります。しかし、いかにも将軍専用の建物らしい造りになっています。ここからは本丸御殿で、将軍が入ってこなかったところをお楽しみ下さい。

では家康様、よろしくお願いいたします。

(名古屋城おもてなし武将隊 徳川家康)

昇太殿、あっぱれなる解説であった。次はわしに任せよ。

18. 上御膳所①

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

ここが上御膳所^{かみごぜんしよ}じゃ。ここも寛永 11 年、1634 年に増築された建物である。

この部屋は御膳場^{ごぜんば}と申す。中央に長囲炉裏^{ながいろり}がある。天井を見られよ。煙を逃がすための出口、煙出し^{けむだ}が付けられておる。

将軍が宿泊した際、料理をつくったのは、この部屋の少し北側、上台所^{かみだいどころ}であった。そこは今、ミュージアムショップなる店になっておる。

料理はいったん、この御膳場まで運ばれてきた。ここは料理を盛りつけたり、温め直したりした場所じゃ。そして山海の珍味をいくつもの膳^{ぜん}にのせ、将軍との宴^{うたげ}の場、上洛殿へ運んでいった。その際、冷めた料理を出さぬよう、ここで温め直し、もっとも美味しく食せるよう、工夫をこらしたわけじゃな。

さて、囲炉裏の周りは、畳敷きになっておる。ここで盛り付けをすれば、床^{ゆか}に料理をこぼすことがあったやもしれぬ。畳敷きでは掃除はやりにくいのう。されど、ここは将軍が食する料理を盛り付け、見た目もきれいに仕上げる場じゃ。ちいと掃除は面倒やもしれんが、床は板敷きにせず、格の高い畳敷きにしてあるのじゃ。

19. 上御膳所②

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

上御膳所の西半分は、座敷になっておる。この部屋は上之間かみのまと申す。正面を見られよ。一段高い部屋が付いておる。この部屋は御上段ごじょうだんと呼ばれておる。正面の襖絵は梅竹雀うめたけすずめず図と申す。その名の通り、真ん中には梅の花が咲き、左側には竹が生い茂り、何羽もの雀が群れ遊んでおる絵じゃ。

御上段の中は6畳しかなく、窓もない。ところが中の壁や襖には、枝垂桜しだれざくら、松、滝など、春夏かちょうの花鳥、風景が描かれておる。

実はこの御上段は、将軍がこれから食す料理を置いておく場所であった。まず、先ほどの長囲炉裏の横で、料理を皿に盛り付ける。皿はお膳の上に並べるが、その膳ゆかを床に置いては、将軍に対して、失礼になってしまうからじゃ。

盛り付けを終えると、料理はすぐに御上段の中へ運ばれた。御上段は周りよりも一段高い。床に置いたことにはならぬのじゃ。

そして、しっかりと襖を閉ざした。将軍が食する料理は、四方を絵で囲まれた部屋に置かれた。そして必要な者が、御上段に近づかぬよう、しっかりと見張っておったはずじゃ。料理に余計なものを入れられては、困るからのう。

さて、つぎは最後の建物となる下御膳所しもごぜんしよに入る。そこで春風亭昇太殿が待っておられるはずじゃ。昇太殿、お頼み申す。

20. 下御膳所

(春風亭昇太さん)

はい、家康様。春風亭昇太です。

ここは下御膳所しもごぜんしょです。慶長 20 年、1615 年に建てられた場所です。しばらく寛永文化の建物を歩いてきましたが、桃山文化へ戻ってきたというわけです。

部屋の中央に長囲炉裏ながいろりがあります。その上の天井には、煙を逃がすための煙出しけむだが付けられています。最初に本丸御殿が建てられた時には、ここの東隣に台所があり、そこでつくった料理は一旦ここまで運ばれました。ここは料理を盛り付けたり、温めなおしたりする所で、ここから客人のところへ料理が運ばれました。

ところが寛永 11 年、1634 年に本丸御殿は大改築され、隣の台所は取り壊されてしまいました。北側に新しく上台所かみだいどころが建てられたわけですが、その際、ここは料理を運ぶ順路から外されてしまったようです。

今回の本丸御殿の復元は、多くの方々からのご寄付があり、初めて実現できたものです。部屋の周りの芳名板は、寄付をいただいた方々のお名前を顕彰し、感謝の気持ちをあらわしています。には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

さて、本丸御殿は、終戦のわずか 3 か月前、昭和 20 年、1945 年 5 月に焼失してしまいました。先人が残してくれた文化財が失われてしまうことは、とても残念なことです。

しかし、10 年の歳月をかけて、やっと復元ができました。もう一度みなさまに本丸御殿を見ていただける、そんな機会ができたことは、本当に意義深いと思います。

さあ、本日のご案内はここまでとなります。短い時間でしたが、お楽しみいただけただけでしょうか。最後に家康様からのご挨拶をお願いします。

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

うむ。春風亭昇太殿、ともに本丸御殿を案内あないいたしてくれ、まことに大義であった。

(春風亭昇太さん)

はは、ありがとうございます。

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

さあ、みなみなよ、本日は名古屋城を最後まで存分に堪能いたすがよい。

(春風亭昇太さん)

みなさま、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。またぜひ、本丸御殿に会いにきてください。さようなら。

(名古屋おもてなし武将隊 徳川家康)

また会おう。さらばじゃ。